

事後評価報告書(日仏研究交流)

1. 研究課題名:「海洋植物プランクトンにおける光合成機能適応の分子基盤の解析」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:自然科学研究機構 基礎生物学研究所 教授 皆川 純

2-2. フランス側研究代表者:パリ第6大学 CNRS UMR7141

第1級研究アソシエーツ Giovanni Finazzi

3. 総合評価:(B)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

緑藻、珪藻、プラシノの光化学系の特性に関するいくつかの画期的な知見を得て、Nature、PNAS などに掲載されたことは高く評価できる。しかしながら、これらの知見のうち、緑藻については当初の研究計画とは異なり、淡水性のクラミドモナスを用いて実験的に得られたものであり、本事業で求められているマリンゲノムおよびマリンバイオテクノロジーへの貢献は必ずしも明確ではない点が惜まれる。また、発表論文数もやや少ないように思われる。

(2)交流成果の評価について

日仏間で若手を中心にした強固な共同研究の素地が築き上げられ、かつ、今後の持続的な交流が期待できることは評価できる。ただし、震災の影響があったとはいえ、双方の研究機関への訪問や具体的な人的交流がやや不足しているように思われる。今後はどのような共同研究をどのような研究課題のもとに進めていくのかを明確化していくことが課題と考えられる。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

当初の申請内容の実施を前提として本プロジェクトを実行したのか、と言う点からは疑問が残る。日本側の研究実施体制が実行段階で変化しており、例えば申請書には北海道大学大学院地球環境科学院 鈴木光次氏が研究メンバーとして記載されているが、終了報告書には同氏の名前はない。研究実施体制がシフトしたために研究内容も変化し、結果として海洋生物を対象にしたゲノムやバイオテクノロジーとしての成果が不十分となってしまったのではないかと懸念される。また、日本側研究メンバーは全員が北海道大学低温研究所であり、国内的にはかなり狭い研究者グループによる成果であることは残念である。今後は、日本側の研究体制がより広がり、日仏の研究交流がより幅のあるものとなることを期待したい。